

震災と原発事故から13年、  
福島で、こころの病が多発していた

# 生きて、 生きて、 生きる。

2025年3月9日(日)13:10開場 13:30開演

(上映後)特別講演:「報告 福島第一原発事故・九州への避難者に対するアンケートの分析結果について」

**伊東未来先生** 西南学院大学国際文化学部准教授

論文「福島原発事故区域外避難者はどう生きてきたかー原発賠償京都訴訟原告の陳述書分析からー」(2020)  
「国内避難民としての福島原発事故避難者の精神的苦痛に関する研究ー苦難の人類学ー」(2020)

場 所:サンレイクかすや多目的ホール(糟屋郡粕屋町駕与丁1-6-1)

入場料:500円(高校生以下無料)

後 援:粕屋町、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、久山町、新宮町、粕屋町教育委員会、宇美町教育委員会、篠栗町教育委員会、志免町教育委員会、須恵町教育委員会、久山町教育委員会、新宮町教育委員会  
グリーンコープ生活協同組合ふくおか、エフコープ生活協同組合、福岡健康友の会、千鳥橋病院附属粕屋診療所、粕屋地区人権運動連合会、粕屋民主商工会、福岡県高齢者福祉生活協同組合ふくし生協ぬくもり事業所

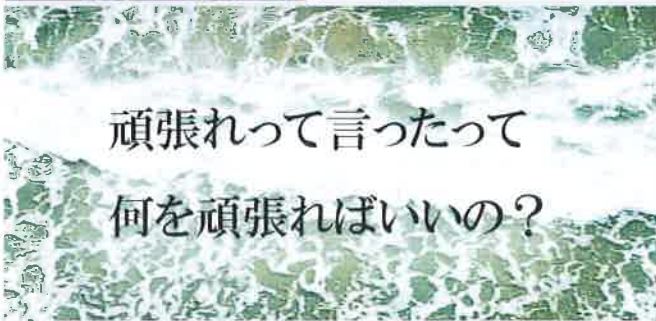




「なんか生かされてんな」

「誰に？」

「それがわからんのですわ」



頑張れって言ったって

何を頑張ればいいの？



「人間もつと泣かなきゃだめだと思っ」

震災と原発事故から13年。福島では、時間を経てから発症する遅発性PTSDなど、こころの病が多発していた。若者の自殺率や児童虐待も増加。メンタルクリニックの院長、蟻塚亮二医師は連日、多くの患者たちと向き合い、その声に耳を傾ける。連携するNPOこころのケアセンターの米倉一磨さんも、こころの不調を訴える利用者たちの自宅訪問を重ねるなど日々、奔走していた。

津波で夫が行方不明のままの女性、原発事故で避難中に息子を自死で失い自殺未遂を繰り返す男性、避難生活が長引く中、妻が認知症になった夫婦など、患者や利用者たちのおかれた状況には震災と原発事故の影響が色濃くにじむ。

かつて沖縄で沖縄戦の遅発性PTSDを診ていた蟻塚医師は、福島でも今後、同じケースが増えていくのではと考えていた。

ある日、枕元に行方不明の夫が現れたと話す女性。「生きていいんだ」という希望を持った時に人は泣ける」と蟻塚さんは話す。米倉さんは、息子を失った男性にジングスカンを一緒に焼くことを提案。やがてそれぞれの人々に小さな変化が訪れていく。

喪失感や絶望に打ちのめされながらも日々を生きようとする人々と、それを支える医療従事者たちのドキュメンタリー。



【お問い合わせ】

福島を忘れない3・11かすや上映会2025実行委員会

電話 092(719)0885 弁護士法人奔流 法律事務所粕屋オフィス